

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

最近のマス・メディアの報道をみる限り、その報道のバックグラウンド、いわゆる背景、原因等を知り分析できることがむづかしいと感じるのは愚生だけではない。例えば、現代社会の状況を考えると、自殺、離婚、自己破産、失業、犯罪、汚職、倒産が増加し、今や日本は未曾有の混沌とした時代に突入したという記事に接したとき。何故自殺が増えたのかを考えると、その原因は、倒産なのか、失業なのか、借金苦なのか、離婚が要因なのか、その原因は多岐にわたり特定できない、いわゆる多岐亡羊の世界なのである。

育児放棄、幼児虐待も離婚なのか、生活苦なのか、それとも「人間の業」なのか。特定がむづかしい。

「業」とは、仏教の世界では人間の行為、行動、身(身体)・口(言語)・意(心)の三つの行為(三業)。又、その行為が未来の苦楽の結果を導くはたらき。善悪の行為は因果の道理によって後に必ずその結果を生むという縁起説の基本となる考え方である。

そこで、「八風吹不動」で、どんな状況に置かれても一喜一憂せず、付和雷同しない物の見方、考え方を学び、「無縁社会に想う」で積極的に「縁」を知り生かす生き方を学び、「自力、他力を問う」で、自づから努力精進を忘れた他力本願ではなく、人一倍の努力をともなった積極参加型の生き方を学び考えたいと思考し論述することにしたい。

どんなに世の中が便利になり変化しても、夢や理想をもち生活し、それ等を実現する挑戦と努力を続けていくべきである。

人間が夢や希望を捨てて、仲間もつukらないコミュニティ、いわゆる共同体を作ったら、それは結果と

して地縁の育たない淋しい社会の到来である。

最近は何れをとりまく人々と共有できる普遍的な価値観にうらづけられた理想や目標をもった経営者や政治家が減ってきた気がしてならない。

そういう意味で、菩提達磨画を書き続けている、その基本は「七転八起」の人生観、いわゆる苦しみが多く、忍耐すべき忍土・忍界の娑婆世界に生きるために転んでも転んでも起ちあがる根性である。

私事で恐縮であるが、先の鎌倉五山筆頭、臨済宗の総本山巨福山建長寺での達磨画展で「達磨圓覚大師賞」を受賞したことである。

これからの日本を担う、前途有為の学生への卒業記念に贈り続けている菩提達磨画と学生諸君、1人1人異なる偈陀を書きそえている。それは「八風吹不動」の心をもった学生諸君の育成である。

2. 八風吹不動を学ぶ

仏教の教え「禅林類聚」のなかに「八風吹不動(八風吹けども動ぜず)」、いわゆる人間の心を惑わす風が吹いても、ゆるぎない信念をもてば、少しも動揺することはない。という教えがある。

その教えは、人間社会にあって経済活動も政治活動もとかく世間の目や他人の評価を気にしながら生きているが一喜一憂することは、ゆるぎない信念のもと「八正道」をつき進めば、無意味だということを説いている教えである。そこには「和」の話し合いがある。

ここでいう「八風」とは、人々の心をゆり動かして惑わす要因を八つの風にたとえたものであり、「利」、



著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪 (野風生)
雅号 樹泉